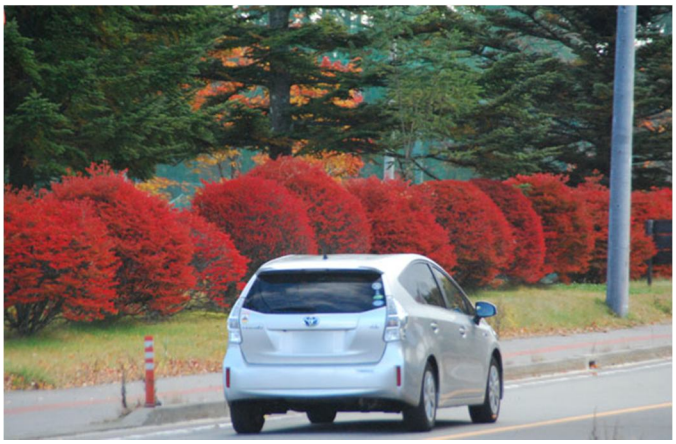
「日々の理科」（第 847 号） 2016（H28）,10,31

「浅間高原の秋（２）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

高原の紅葉は、一雨ごとに一気に進みます。一週間後に行っても、すでに見頃は過ぎている・・・ということも多い。今回は滞在時間が短かったのだが、あちこち走り回って、色づいた木々を楽しんできた。



国道沿いの灌木も、美しく色づいている。こういうふうに真っ赤に色づく樹木は、それほど種類が多くないので、つい道端に車を停めて撮影してしまう。

こちらは、北軽井沢の駅舎である。夏の間に、私が水彩画の作品展を開催した建物だ。夏は多くの人で賑わった駅舎周辺も、今はひっそりとしている。駅舎の向こう側には浅間山が見えるのだが、この日は午後から霧がかかっていて、残念ながら浅間山を見ることができなかった。

こちらは、駅舎の前から「大学村」に向かう道。「大学村」というのは、大きな別荘地の名称で、もとは法政大学の学長が始めたものである。今は誰でも物件を購入可能だが、「夏の間は工事・草刈などの騒音禁止」といった規則が厳しい。その分、昔ながらの静かな別荘地の雰囲気を残している。この道は、ハイロン地区という畜産の盛んな地域にも通じているので、トラックやタンクローリーもよく通る。

これは、私の山荘に入る道。奥には色づき始めたカラマツの森が見える。遠くの山は「鷹繋山（たかつなぎやま）」という古い火山で、この山も麓から山頂まですっかり秋色になっている。写真を撮っていたら、キツネの親子が餌を探して、横切っていった。